

Title	大阪商科大学杉本学舎とその周辺地域に関する記録
Author	松本, 裕行
Citation	大阪市立大学史紀要. 9 卷, p.30-48.
Issue Date	2016-10
ISSN	1884-3522
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学史資料室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171208-006

Placed on: Osaka City University

《補足資料》

大阪商科大学杉本学舎とその周辺地域に関する記録

【凡例】

- *項目は学舎（外観）、学舎（内部・施設・設備）、学舎（構内）、杉本町（周辺景観）、戦争と大学（戦時中・戦後直後）とし、記録文はそれぞれの項目に該当するよう筆者が振り分けた。
- *文章とその表題については、できるだけ原文のまま掲載した。旧字体を改めておらず、また句点・読点も原文のままとした。但し、旧字体に変換できなかった文字は新字体にした。続き文字については現代仮名遣いにした。
- *新聞記事などで改行されていないものは、読みやすいように改行を行った。
- *資料の途中から文を抜粋している場合は、文頭に「…」を付けている。

学舎（外観）

よく言はれる様に新学舎は、三商大の中にあつて外観的には一番見劣りして居る。東京及び神戸のそれは、寧ろ豪華を極めて居るが、之に比すると本学舎は、貧弱な感がないでもないのだが、質素な建築の中に本當の特色が見出されると思ふ。他力の場合は、兎角無駄な浪費が行はれ勝ちだが、自力の場合は、實用主義になるのは、當然である。出来るならば、もう少し市内に接近せしめて欲しかったが、三商大の中にあつては一番交通が便利である。而して明朗、清楚の四字が新学舎を説明して餘りある。

金谷重義「新学舎の竣工を祝す」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.28

母校学舎新築工成り大阪市南端杉本町の一廓に淺香山の松林蒼蒼たるに對して明朗なる白壁館の聳立するを眺める時、歡喜の涙さへ禁じ得ないのである。夫れは母校の昇格に盡力したる同窓會員として目前に其雄姿を見た自然の感情であります。

田中藤太郎「感想」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.36

新築の校舎は、停留場に降り立つてみて、誰しも工場のやうだと考へられるであらうと思ひます。これは新しい土地を拓いて、新しく建てられた事でもあり、附近に丘陵のない爲でもありませうがこれに關聯して次のやうな感想を得たのであります。

泉山庄一郎「所感」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.40

元ヨリ、新学舎ハ、輪奐ノ美ノ誇ルベキモノヲ持ツテ居リマセン、然シナガラ、華ヲ去リ實ニ就ク商人道ノ都、大阪ノ持ツ商科大學ノ学舎トシテハ眞ニ相應シキモノデアリ、敢テ時流ニ阿ラズ、飽迄モ實相ニ即シタ新学舎ヲ母校ニ與ヘタ大阪市當局ニ對シ、我等ハ謹ンデ謝意ヲ表シタイノデアリマス。

村本福松「祝辞」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.42

昭和七年、杉本町の新学舎に移転する運びとなり、その工事も順次進み、昭和七年十二月、高商部と予科の校舎が体育館やその他の付属設備と共に出来上がった。共に鉄筋コンクリート三階建て、烏ヶ辻に比してスマートな感じを受けた。

(中略)

昭和十年十月、全学の杉本町への移転が完了したので、その年の十一月八日～十一日の間、「新築学舎竣工式と記念祭」が盛大に行われた。長年の夢が実現した感じであった。関市長、河田学長はじめ、多くの来賓、教職員、同窓生、在学生らが喜びを共にした。万国旗で飾られた本館の時計台の晴れ姿は今も忘れられない。ここで初めて「大阪商科大学」が門出したと実感した。

その後、私はこの新学舎で昭和十二年三月まで在学したが、卒業の頃は植樹も次第にその数を加え、野中の学舎にやや緑の色が増えて行った。

小島誠「烏ヶ辻と杉本の間」『有恒会百年史』pp.174-175

与えられた題が「予科の学園」ということだが、正直言って、予科には学園という言葉から想像されるロマンチックな雰囲気は感じられなかった。当時はまだ田園風景が残っていた杉本町だったが、野原の中にポツンと建っているコンクリートの校舎は、どちらかといえば工場の事務所のような感じで、樹木の茂る丘陵の中腹にでも建っていれば学園という名にふさわしかっただろうが、それとはおよそ似つかぬものであった。

井関一徳「予科の学園」『有恒会百年史』、p.194

現在、通信病院の一隅に北向きに烏ヶ辻校舎跡の碑があり、よくその前を通るが、昭和八年、その校舎で受験した。旧い建物だったなあという記憶があるのみで、その年の四月、新装になった杉本町の校舎へ入学した。工事跡の棒杭鉄線が散乱していたのを覚えている。

下井雅信「高商部の学園」『有恒会百年史』p.223

校舎は、杉本町の田園の中に新築したばかりの白亜の建物でした。当時は杉本町駅から遮るものは何もなく、一際目立つ威容を見せており、中学校の木造のボロ校舎とは何と違うものかと感じたものです。

須原次郎「高商部の学園」『有恒会百年史』p.224

…高野線汐見橋駅から我孫子前下車、畑の中を歩き杉本町駅の前に、予想していたキャンパスはおおよそかけはなれた、粗末なコンクリートの校舎があった。

渋谷博彦「私の歩みし道—大阪商科大学時代—」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.165

学舎 (内部・施設・設備)

新校舎の外観は敢て堂々輪奐の美を誇る程にも感じない否寧ろ大學の夫れの如き感を抱かしむるにはいさゝか貧弱の様にも思はれたが内部を隅なく參觀して實に實用的に設計せられて居るのを痛感した今や内外形式的完備を見た以上愈々以て内容の充實を致し吾大日本に誇る唯一の市立商科大學の眞價を内外に發揚せらるゝ様學内の當事者各位に切望する

吉崎正之助「所感」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.39

当初はすべてが物珍しく、殊に図書館の閲覧室は素晴らしく、各人が三方を仕切った机で静かに読書に耽ける喜びを持つことが出来た。もっとも冬には教室のスチームが利きすぎて困った。烏ヶ辻では乏しい石炭ストーブであったから、贅沢な悩みである。

吉村健「昭和八年から十一年の時代」『有恒会百年史』p.171

昭和八年、烏ヶ辻より杉本町に移転。真新しい白亜の校舎、教室にスチーム、要所に鏡が設置してあり、木造の古めかしい校舎で小倉服着て質実剛健に慣れ親しんだ者には全くの驚きだった。

小山一雄「高商部の学園」『有恒会百年史』p.220

第二次大戦も末期に近い昭和十九年四月、念願の入学試験に合格した高商部一年生は、胸ふくらませて講堂の入学式に参集した。現在本館ないし一号館と呼ばれている旧制商大学部棟の講堂は、占領軍の接収による荒廢の修復もままならず、当時のそれとは一変しているのも感慨ひとしおである。とりわけ、筆者のように土佐から笈を負って来た者には、華麗なシャンデリアの照明、敷き詰めたりノリュウムにしつらえられた松竹座（当時でも大阪での一流映画館）以上の座り心地のよい折り畳み式椅子、高い天井から床までゆったりと垂れた厚いカーテンなどの眼くるめくような光景に圧倒されたのも、昨日のことに思われる。「さすがは大学、これはたいしたものだ」と感嘆すると同時にそこはかとなし愉悅と商大学徒としてのプライドが湧然と高まってくるのを実感したのである。

辻厚生「幻の“母校”「大阪工業経営専門学校」顛末記—大阪市立大学百年史の一齣—」
『有恒会百年史』p.309

新校舎は白亜の新装、ドイツ・ケルン大学に似ていると言われ、中央煖房設備をもち研究室は南に廊下を配して、読書のための光線を考慮して北窓にされている。戦後燃料の不足のため煖房設備が利用できぬようになって、なぜ北側廊下南窓にしないのかを不満に思うのだが、当時としては理想の設計であつたらしい。

谷口知平「大阪商科大学より大阪市立大学法学部へ—終戦前後—」『有恒会百年史』pp.373-374

…講堂が立派で、椅子も上等な布が張られていてクッションも良く、一席一席が上げ下げ出来る劇場の椅子のようで、さすがはと感心したことである。

今川直次郎「風に雲に」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.52

教室は校舎の東側、二階または三階の部屋で、日当たりがよく、冬などは時々変な音を立てるスチーム管に座布団をしいて腰をおろし、ぼかぼか当たる太陽を背にうけて、他愛のないおしゃべりをよくした。常連風になった者もあり、いつも客用の大きい座布団を二つに折って敷いていた色白の久次米君は剣道部員で、立派な体格だったが卒業後すぐ腸チフスでなくなった。時々おしゃべりに顔を出すにきび顔の真田君は僕らの草野球では四番、強打者だったが、虫垂炎（当時盲腸炎といった）でなくなった。人間分からもんやと思った。のちの二・二六事件のこともここでしゃべった。大阪も雪だった。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』pp.35-36

森：私は入学当初一年程は烏ヶ丘に通いましたが、あとは杉本町の新校舎に移りました。遅刻三回は一回の欠席にせられるというので、雨のあとなど泥んこの田舎道をよく走ったのを憶えています。烏ヶ丘校舎は赤煉瓦でなかなか良かったが、私らの入った時は雨天体操場を板仕切りした仮教室で習いました。杉本町の新校舎は輪奐の美でもあるのかと思えば案に相違して廊下は狭く校舎も殺風景で失望しました。あとに建ったもの程次第に良くなりましたが——。

村本：実際殺風景なものだったんで、これはいかぬと考え、廊下の半分だけでもタイルを張ることにし、壁の色も部屋毎に塗り分けさせて変化をつけさせました。それで随分見違える様に明るくなったのです。それから図書館の閲覧室は我々の希望を容れたもので当時としては他にない自慢のものでした。

村本福松・森好夫ほか「商大に昇格してからの回顧談—七十年の回顧・後半の部の座談会—」

『有恒会七十年の歩み』p.120

学舎（構内）

廣袤五萬貳千五百坪ありといふ杉本町の一劃に綠なす松林を背景に白堊の廊廓巍峨たる時計臺の威容は本邦唯一の市立商科大学成れりの感を深ふするものがあつた。

輪奐の美必ずしも誇るものありと言ひ得ないが蓋し内容に至ては整備着々其緒にあるを窺ふるに足るものあり經濟研究室の如きそれであらう圖書館書庫に至ては設備及内容充實に懸命の努力が拂はれつゝあるを想はしめた。

米田生「母校竣工祝賀式に臨で」『大阪商科大学同窓会会報』99号、p.33

散會後學内を巡覽して近代的科學の精を盡した建築の美と設備の完璧に一驚を吃した諸學部

研究室の構造図書館及閲覧室、諸種運動競技場に至る迄眞に至れり盡せりの感に打たれた母校の年々歳々進歩して已まず遂に今日名實共に我國商工業の中心地大阪に最もふさはしき實業教育の大殿堂と成つた事に異常の愉悅と誇を感じる次第である。

吉川龍之助「新校舍成つたを機として同窓會としてやつて見たい事」

〔大阪商科大学同窓会会報〕99号、p.34

「麥畑の中のホワイトハウス哉」は本年五月私が初めて仰いだ新學舎の感想であつたが、同窓會副委員長の職を穢せるの故を以て十一月八日落成祝賀式に參列し、再び感想を新にするを得た。

(中略)

學内を一巡して感じた事は、先づ講堂が充分廣くつてあつた事、之は誠に成功であつた。又圖書館の立派な事、而も藏するゾムバルト文庫、福田文庫、關文庫を初めとして十八萬冊、雜誌類を合して二十萬の圖書あり、六十萬冊の東京帝大には遙に及ばざるも、其の部數に於ては右に次いで日本第二と聞く。

(中略)

大學の研究室も少しく手狭な様に感じたが如何なるものであらうか。何分新築の事とて樹木も稚く少く、さびを見出し得ないのは残念だが、同窓會の或年度によつては記念植樹の寄贈が行はれたとか聞いてゐるが、甚だ結構な事で、それぞれ斯る企てはあつて欲しいと思ふ。輪輿の美より云へば、東京、神戸の兩商大より遙に劣る由なるが、校舍のみが學問を生み出すものではあるまい。教授のスタッフに於ては優るとも劣るとは考へられない。

山本顧彌太「落成式參列所感」〔大阪商科大学同窓会会報〕99号、p.35

誇る可き五拾有餘年の歴史を持つ我大阪商科大学は爾來幾多の他に誇る可き傳統的精神を持つてゐる。曰く實證的、規律的、曰く端正優雅等に。此等の精神は我等商大で育つた者の血の中あつて常に我等を導いてゐるのである。此は實に尊ものである。併し私は此等の立派な精神の外に將來我大阪商大が更に更に大飛躍するかに、もう一つ他の重大なる精神を必要とすると思ふ。即ち剛健と云はふか、勇住邁進と云はふか、頗る開放的な潤達なる精神である。私は母校に常に此の精神を欲してゐた時恰も先覺知己の涙ぐましき奮闘に依り大和川清流に臨む五萬數千坪の廣大な地に綠したる淺香山を背景として頗る開放的な洋々たる新校舍が建設されたことは誠に有意義な事と思ふ、我商大は之に依つて從來とは一種異つた新しき經驗を得傳統的精神を持つ事であらう。

池尻正二「新校舍の意義」〔大阪商科大学同窓会会報〕99号、p.41

学園緑化運動推進

新學舎が竣工し授業、研究、運動上の諸施設は完璧に近いまでに整備されたが、広袤五万余

坪のうちに一木一草のみるべきものなく、校庭の索莫さのなかに白堊の学舎が聳立するのみ。

この状態を遺憾とした同窓会有志の間では、「僅か数株の植樹と雖も、校庭に年経れば亭々鬱然と繁茂して、その翠緑は白堊の大厦を粧うに適わしく、その樹蔭は夏日にわれらの後進にこよなき想いのオアシスを提供する。加うるに植樹の成長につれて、それに秘められたわれらの母校愛もまた高まるであろう。われらの手による母校学園の緑化、寔に宣なるかな。」と寿史会、而楽会、大悟会等が緑化運動に先鞭をつけ、さらに十一の会で計画が進められ、運動はいよいよ継起拡大の気運を呈していった。

作道好男・江藤武人編『夕古城を仰ぎ見て』p.220

それが昭和九年九月から杉本町の新校舎で学ぶことになった。阪和電車（現 JR）の杉本町で下車、線路沿いに南行すると前方に広大なキャンパスが広がる。正門から遥か彼方に塔を中心に両翼を広げた白亜の校舎、左手には図書館、その背後は経済研究所、まだまだ広い空間を残した敷地。今日からここで学べるのだと思う高ぶりが湧き上がる。昭和十一年卒の連中は奇しくも烏カ辻の旧校舎に最後まで学び、杉本町の新校舎には最初に入ったことになる。

（中略）

キャンパスの西南隅には、今は無いが、土手で囲んだ大きな溜池があり、恰好な思案の場所を提供してくれた。

吉村健「昭和八年から十一年の時代」『有恒会百年史』p.171

私は水泳部に入っていたので、何といってもあの大きな池（葛原池ということを知った）が思い出である。体育館に二十五メートルの室内プールがあったのだが、温水設備がなく、五月になっても水温十四度で、五十メートルも泳ぐと腕が上がらなくなって、とても練習にならない。やむなく、あの構内の大きな池の一部で藻を抜いて、食用蛙と一緒に泳いだものである。今、その場所に立派な五十メートルのプールができていますが、このプールの建設については水泳部の OB 一同の並々ならぬ努力があった。あの池での練習の苦労が、後輩達にプールを作ってやりたいという熱意の原動力となった。

近藤梯治「半世紀昔の思い出」『有恒会百年史』pp.181-182

水泳部の練習は毎年四月下旬の天長節の頃から始まる。学部の陸上グラウンドの南側にある溜め池においてである。予科、高商部の体育館内に室内プールがあったが、プールとは名ばかりで、長さ二五メートル、巾は三コースしかなく、温水装置がないため水が極端に冷たく（十八度位）、四月、五月は使いものにならなかった。学部の池は各辺二〇〇メートル位ある大きな溜め池で、食用蛙がグーグーと鳴いている不気味な雰囲気であった。池の中ほどに木製のスタート台らしきものが二つしつらえてあり、その間を往復して泳いだ。もちろんコースロープ等気のきいたものは張ってないから、横っちょへそれてしまうことも稀でなく、タイムを測ること

も出来ない。池の土堤の上に簡単な脱衣場があったが、そこに干してあるタオルや褌がみな盗まれるというハプニングまであった。

抱喜一「水泳部の思い出」『有恒会百年史』 pp.197-198

殆どの学生はクラブ活動をしていた。運動部は入学当初、杉本町グラウンドが整備されていないので、烏ヶ辻校舎のグラウンドに半年ほど通った。その後、高商部、予科の裏のグラウンドが使用出来るようになった。高商部の北側に剣道部、柔道部の道場及び角士部の土俵と籠球部の練習室があり、なお卓球部は専用出来る場所なく、籠球部の練習室を借用した。

高士会「杉本町新学舎入学第一号」『有恒会百年史』 p.215

校庭は移転間もない事もあり、樹木も少なく殺風景。東側のグラウンドは高商部、予科が主として使用、学部が移転してからは本館西寄り阪和線沿いに観覧席のあるグラウンドが出来、ここも使用した。学部グラウンドの南に大池があり、散策もできた。池から大和川の堤防までは障害物もなく見通せた。

小山一雄「高商部の学園」『有恒会百年史』 p.221

大阪商大は、阪和線の杉本町駅の東側にあった。駅を降りて、東を向いて、右手に学部と、経済研究所、図書館があり、学部校舎の正面に、高く時計台が聳えていた。学部校舎の裏に、大きく立派な講堂があった。時計台を正面に見て、校門に入ると、右手に小さな池を前にして、喫茶店があった。高商生には、一寸学部の喫茶店には、大きな顔をして入り難い気分であった。夏ともなれば、日が暮れると、この池で牛の吼えるに似た食用蛙の鳴き声が、ぼうぼうと闇にひびいたものである。

校舎の右手に、運動場、そして、鉄骨づくりのネットのついた野球場があった。運動場には、西側に、木組で作られた観覧席めいたものがあったが、人が入ることが少ないせいか、今にもこわれそうな有様であった。運動場、野球場も雑草がところどころに生え、軍事教練にかり出されざるを得ぬ戦時では致し方もないところであった。

校舎の裏手には、大きな池があり、その南は、大和側の土手であったが、針金柵で入れないようになっていた。級友の中には、夏、この池で泳いだと云うものもあった。

駅から東へ、学部を右手にして、畑の中を歩いて行くと、校門に至る。予科と高商のキャンパスである。校門をくぐって、北側に南面して建つのが、わが高商部であった。予科は高商部の右手に、西面して建っていた。その間に、体育館があり、屋内プールがあった。校舎の東一帯は、運動場であり、高商、予科生は、ここで教練と体操をやった。いや、やらされたと云うべきか。

小林一雄「商大での思い出—先生方と友人たち—」 pp.3-4

弓道場は阪和線が大和川を渡る少し手前の東側に位置し、さらにその東にはかなり大きな池の堤があった。道場は南に向いて十五間向こうに塚^{あづち}があり、更にその向側には馬術部の馬場があった。ただしその頃はそこでは馬術の練習は行われず大学の小使さんが野菜を作っていた。

道場はその頃関西で一、二といわれた立派な檜造りで、間口は八間、奥行きは七間程あったように思う。道場の正面には河田嗣郎学長が余り濃くない墨色で「形随心」と揮毫し、沐谷と署名された遍額^(マフ)が掛かっており、弓道部に相応しい気品を漂わせていた。

堀内英雄「憶いで二題」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.106

やがて僕は、二号館の北側にテニスコートがあってラケットもボール貸してくれることを知り、毎日のようにそこで、大倉でもよくやっていた素人の軟式庭球をやることにした。コートは二面、その近くに国沖のおじさんの「理髪店」(小屋)があり、そこへ行ってははじめのうちは二枚刈り(二十銭)にしてもらい、おじさんの「世間」社会学も教わった。…国沖さんは戦後もずっと元気で、市大で理髪店をやっておられた。だんだん背中がまるくなってきて、昭和四〇年頃にやめられ、やがて亡くなった。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』p.27

スピンドル油のにおう銃器庫は体育館南にあった。高商部(三号館)建物のずっと北東隅の辺りに射場があり狭窄射撃(三〇メートル)の練習もやり、また城東練兵場内側の射撃場で何度か三〇〇メートル実弾射撃の演習もあった。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』p.141

私が昭和十二年(西暦一九三七年)に大阪商大予科に入学した時の道場は、昭和三年の大学昇格に伴って現在地に造営された新学舎の一環として、昭和八年に落成した長屋式道場の中の剣道場であった。長屋式道場は当時としては珍しく、近代的な総合武道場で合理的且つ開放的であった。当時の剣道部長長田仁義先生の提唱により「百錬道場」と呼ばれていた。

松本良諄「不可勝・不可敗と施無茶畏—剣道部史外伝」『大阪市立大学剣道部創部百周年記念誌』p.66

二、旧百錬道場火災による焼失について

昭和四十一年八月三十一日当日会社から帰宅後の九時のテレビニュースで市大道場火災焼失が報道され突然びっくりした次第である。

岡田幸雄「監督の思い出」『大阪市立大学剣道部創部百周年記念誌』p.76

第一景(×月×日)清心館から弓道場の裏へ出た。夏草が池の方までびっしり茂り、熱い草いきれがムンムンする。人影も見えない昼下がりが。食用蛙がしきりに騒ぐ。池の堤を歩く。白緋と袴に夏風が涼しい。

向岸に誰かが一人ポツンとしゃがんでいる。笠を着ているのでわからなかったが、近づくとクリさん(辻田先生)であった。「釣れますか?」とたんに数本の釣糸を前にして真っ黒な日焼け顔が一っばいにほころんだ。「ああ、よう釣れよる……。」

松井謙次「複雑な記憶とささやかな希いについて」『有恒会七十年の歩み』p.111

その頃の杉本町の予科の校庭には、一面にクローバが生えてあり、ひる休みに友達とその上に寝ころんで空を仰いでいると、ひばりが空いちめんにも鳴いていたのを思い出す。

木上兵衛「学生時代の思い出」『有恒会創立八十周年記念誌』p.147

1934(昭和9)年に杉本町の現在地に移転してきた大阪商大は、その新天地として17ヘクタール余(5万2500坪、予科・高商部を含む)の敷地を擁することになった。いまは知る人のすくないが、そのなかには、高い堤をめぐらした3ヘクタール余にもなる四角の大きな池がふくまれていた。場所は本館地区、現在のプールの南側の運動場トラックをすっぽり呑みこんでしまうくらいのもので、いわば本館地区(11ヘクタール余り)の四半分を占めていた。

(中略)

これはむかし「葛原池」といった。300年も前の杉本村には「うと池」というものもあり、古代以来の近傍の「依羅(よさみ)池」ともども、豊富な農業用水を湛えていた。

(中略)

学生たちも時にはプールがわりにひと泳ぎを楽しみ、近所の子供たちにも夏休みの格好の水遊び場であった。飛込台が2カ所に設けられていたと幼童の思い出ばなしを語る現職員もいる。まことにのどかな学園内の池であった。その池は、今はない。1945年、アメリカ駐留軍は、商大一円を接収すると、サッサと池を埋め立ててしまった。

藤野明「葛原池——大阪商大キャンパス内の池——」『大阪市立大学百年史』全学編(上)、p.161

杉本町(周辺景観)

東に遠く生駒連山、南に近く大和川の松堤に仕切られた閑寂の杉本町は往時の依羅村大字杉本とのみで地誌にもたいして恵まれてゐないが寶永元年大和川の改修によつて浪速近郊有数の沃地となつた農園である、だから、商大の新敷地として決定した時も農民の間にいろいろ紛議が起り、遂に土地収用法まで飛出し三年度からの計畫事業のはずが、やつと六年に着手というスロー・モーションで本年二月完成した、

総工費二百五十万円校地は南北二部に分れ北に豫科、高等商業部、體育館、南に學部本館、圖書館、研究室、經濟研究所、書庫、各グラウンドが行儀よく配置された鳥瞰圖は名實ともに`野に在る學園、の展望にふさはしい、

大学の周囲はいまはまだポツリポツリと古木屋や靴屋が青い畑地のなかに、恥かしさそうな軒をならべてゐるだけだが、市當局の夢見みる`學園都市、建設の將來性は十分にある

〔大阪毎日新聞〕昭和10年10月21日朝刊

昭和四年当時は阪和線は予定されているにすぎず、商大建設の予定地杉本町を名和君と見に行った頃は大和川の水は清く、北岸堤防には、松樹が並び、この辺りに研究室が出来てくれればまことに風光明媚であろうと期待したりした。

谷口知平「大阪商科大学より大阪市立大学法学部へー終戦前後ー」『有恒会百年史』p.373

それにしても、あの頃の杉本町の空はアッケラカンと大きく広く、その下あたりはいつも森閑としていたように思うのは、記憶の美化のせいだろうか。キャンパスの周りに開けていた平らな畑や野原、そこでは指の千切れそうに寒い朝、大根を洗う農家の主婦たちの笑い声^{つよ}が強く響き、春がくると雲雀の声が澄んで聞かれた。

今井茂雄「断章・杉本町時代」『有恒会百年史』p.204

風景回顧——。

当時の学舎は田園風景のただ中に、内外とも飾り気なく佇む建造物の一群。ときに天然肥料の香気。駅の入出口はいまと反対側、木柵ひとつ。踏切は堺寄りだけ。そこを渡ると大和川まで人家寥寥。砂の河原。昼食場所は、学食以外は門前のおでんやと学部正門前の小さいめしや、あとでペンキ看板の「アカデミ」が開店。おでんやは毎日大繁昌。そこのおでんにたかる蠅群の黒と、溶き芥子の鮮やかなコントラスト。

伊達陽「学生生活の思い出ー今昔回想記ー」『有恒会百年史』p.206

杉本町学舎は真新しく、きれいな白亜の建物であったが、周辺は整備されておらず未完成で、門以外は扉もなく、外周は木杭に鉄条網が張り巡らされ、その鉄条網に近く業者がボロ切れを引っかけて乾かしていたのが思い出される。

田圃の中に建てられた校舎で、杉本町駅から高商部予科校舎まで約二百メートル、民家も喫茶店もなく、一、二年してやっと堺大福餅の店が学部校舎近くの道角に出来た。夏には蛙の飛び交う田圃の近道があったが、織田松太郎主事から農家とのトラブルを起こさないため、ショートカットウェイは通らないようにと当初より嚴重注意があった。しかし、遅刻しそうな連中はそれでも田圃の近道を走っているのがよく見られた。

授業中、農家の香水の香りがするので窓をしめたこともあり、阪和線の乗客の中には「大阪商大というが、この大学は農大やな」とチャレを言う人があったとか。いずれにせよ勉強するには誘惑のない環境であった。休講の一時間は、近くに喫茶店もないので、わざわざ南田辺まで出張する者もあった。

高士会（高商昭和十一年卒業）「杉本町新学舎入学第一号」『有恒会百年史』pp.211-212

…当時の学園は杉本町へ移ったばかりで、駅からの道は砂利道、雨の日は泥んこ、田圃に稲塚のある昔風の田園風景だった。

下井雅信「高商部の学園」『有恒会百年史』p.223

私は昭和九年春四月、竣工早々の杉本町新学舎に入学した幸運児であった。烏ヶ辻の旧学舎に比較し、あらゆる点で問題にならぬ位の立派なものであった。しかし、学舎以外の周辺の有様といえば田圃と畑ばかりで、杉本町駅から学舎まで視界を遮る建物は殆どなかった。

松田勝臣「高商部の学園」『有恒会百年史』p.225

市内の自宅から郊外の当時のなお田畑がたくさん残っていた杉本町に通学したので、いろいろな点で楽しい見聞を得られた。春夏秋冬、田畑の変化を見つつ（特に一時は高野線我孫子駅下車ルートを使った）登校したので、稲作、麦作の手順や、野菜の栽培も不十分ながら判るようになった。

(中略)

ともあれ、まずい高商部の食堂を敬遠し、殆ど予科食堂と柵外の関東煮屋で昼食をとり、学部のゆっくりした図書館で読書し、休講の掲示あれば南田辺の喫茶店や天王寺の名画館に押し出し、稀には下手なテニスもやれたし毎月のクラス会での若さの発散、毎年の学内対抗ボートレース、高商部全員の鳴門丸貸し切りの瀬戸内海周遊や、阪神間の大水害に芦屋魚崎地区への教練服での勤労奉仕など楽しい思い出となっている。

田部芳雄「高商部の学園」『有恒会百年史』p.234

外の空気がおいしくなると、フランス語組は大和川の河原の砂に座って幾つかのシャンソンを教わった。皆の目が輝いていて、本物の授業がそこにあったような気がする……。

米田四郎「第二外国語はフランス語」『有恒会百年史』p.251

当時、学生の数は高商部六百名、予科三百六十名、学部四百五十名位で、全学合わせて千五百名もいなかったはずである。だから、その頃、街で予科の人に会っても、何となく（名前はともかく）顔は覚えていた。通学は阪和線で、電車は精々二両連結。杉本町の駅から学舎まで一面の畑で、のびやかな空気であった。駅で末川博教授が風呂敷包みをかかえて座っておられた。京大事件の関係で末川先生をはじめ佐々木惣一、恒藤恭といった碩学が来ておられた。我々は直接講義を受ける榮に浴することはできなかったが、ひそかな誇りを覚えていたものである。

茂藤義定「高商部の学園」『有恒会百年史』p.254

キャンパスのぐるりは、すべてが田か畑で、民家は殆ど見当たらなかった。冬は、稲藁の塔に、白く霜が降りた。

神戸高商へ行った、明星での友達に云わせると、大阪商大は、肥臭い（こえくさい）と云うことであった。成程、周辺の田や畑には、肥え壺が幾つもあった。

小林一雄『商大での思い出—先生方と友人たち—』p.4

杉本町の学校付近は、その頃は、家一軒ない、田圃のなかの吹きさらしであった。

小野博「杉本町時代のこと」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.248

休日の練習の昼食は学部正門の前のうどん屋でうどんとご飯で腹ごしらえしたのだが、その組合わせうどん屋のおばさんが懐かしい。

小菅宇三治「テニス部の思い出」『大阪市大硬式庭球部九十年史』p.62

昭和九年三月当時、学部校舎（今の一号館）は建設途上で、講堂は未完成であった。入試は新しい高商部校舎（三号館）中心に行われた。その季節、杉本町の辺りは西風がかなり強く吹くことも多いと聞き、僕は白い分厚いセーターを着こんでいた。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』p.18

当時の軍教は、戦史の話など室内でやる以外は、野外で大体「浅香町付近より前進する敵を…」といった想定で、杉本町駅付近から東の方へ向かって行動した。付近南瓜畑が多く、田圃も横切り、貨物線の東、墓場の辺り、あぜ道を通って浅香町方面へ向かって行くことも多かった。今その辺りのおもかげはほとんど残っていないが、大和川べりに出ると河原には何となく面影が残っている。小屋住いの人々もいた。牧田君が肥えつぼにおちたのもそうした訓練の一と時で、一ヵ月ぐらゐは教室でもその余香がただよった。彼は京都から省線通っていたから往復の車中でも匂っていたことであろう。蓋をつくるとか、目印でもするということもなく、表面が乾いたように見えるような処へでも誤っておちこんだのであろうか。人の好きそうな麻生豊の漫画「只野凡児」の主人公に似ている彼にくわしく事情をきくことは遠慮するほかなかった。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』pp.45-46

「杉本町」は前途のように「天王寺」から五つ目の、文字通りまだ寒駅という感じで駅舎もすぐ小さく、行き帰り、駅の改札口を通らずにプラットフォームから線路へ飛びおり、また線路からプラットフォームへ上り、時間と手間を節約する不心得者もいた。

(中略)

大学の中を散策してグラウンドの西南の溜池でボートを漕いだり堤をぶらぶら歩き、つづきの大和川堤防の松林を歩いたりした。時には大和川の鉄橋を渡って堺市の方へ行く者もいた。僕はよく知らない堺へなど別に行きたくもないが、行きがかりで一度だけ渡ったことがある。電車が通ったあと走ってすぐなのだが、あわてると橋桁の間がよく見えなくなり、少し立ち止まってまた駆け足、というような風にして渡った。僕としては珍しく思い切っことである。

(中略)

「杉本町」に話を戻すが、当時も駅を出て少し南の方に踏切があり、そこから学部正門まで斜めの田舎道が通じていた。春は菜種などの咲く田舎道に二軒ほど大衆食堂があり、運動部の

人々が常連として利用していたようだ。高商部の方は駅から少し北、まっすぐの砂利道が間もなくでき、付近一帯れんげ畑もあり、裏門（北門）近くに食堂があった。もちろん学内（三号館）にも食堂はあり、弁当持参組もあった。…東の出入口を出ると石だたみがありその左に平池靴店、時に半革を打って貰った。…平池靴店の前をずっと東へ行くと堤防のように段差がついていてそこをどンドン下りると、ごろごろと石も転がっている運動場があり、キャッチボールをした。

山崎時彦『早春腥風 事変下の学生生活』pp.47-49

阪和の駅から遮るもののない豊かな空間に、高商部の遠望。その隔たりが私は好きであった。雨が降れば中央の道路がぬかるんで、あえて遠回りをしたものだ。

(中略)

午後、駅で帰りの電車を待っていると、その道を大男のグレンショーさんが、周囲をはばかりず大股で走って来るのを見て感じたものである。アメリカ人だなど。英国人のラングレー氏なら「電車で遅れても男は走るものではない」と言いかねない。

同じ道を雨降る朝の登校時、マーティン先生が急ぎ足で歩いていた。T君や私達は、二三人遠回りの舗道を走って校門で追い抜き、" The longest way round is the shortest "（急がば回れ）と言ったら、何やら英語で笑われた。あの中央の泥のメインストリートが懐かしい。

渡邊雅美『信太山からラダまで』p.7

大和川の堤防から学部の建物を眺めると、池の向こう、木々の間に白亜の学舎が浮かび上がり文化を感じさせた。杉本町は私にとって文化教養の最初のシンボルだったともいえる。在学中、高商部の門前に一軒関東煮屋が建ったほかは畑しかない、というのは恵まれていた。基礎的欲求以外何も考えなくてよい健全な雰囲気である。

渡邊雅美『信太山からラダまで』p.9

当時の杉本町駅は、線路の東側に改札口があり、畑を田の字のかたち^(ママ)に三本づつ東西南北に道路がつけられていた。道路には、栄養の悪いプラタナスの木が、ところどころ、歯がぬけたような状態で風にそよいでいた。私が大阪商科大学を見た第一印象は、何という殺風景な大学だろうという驚きであった。

(中略)

阪和線の西側は、殆ど人家がなく、数軒の学生専門の下宿・アパートがあるだけだった。杉本町駅の西南に「友の家」があり、ここに出入する若い女性の姿がわずかに色どりをそえていた。冬になれば、海からのかすかに潮の香のする強い西風が、幾日にもわたって吹き続けた。古い俳句に「木枯らしの果はありけり海の音」というのがあがるが、白線いりの帽子やマントを吹きとばされそうになりながら、感じた実感は、それであった。阪和線の線路から西が殆ど畑

地（麦だとか、大根とかの野菜がうえられていた）なのに対して、大学から東は殆ど稲田であった。現在の二号館（昔の予科校舎）の東側は運動場であり、簡単な金網の下から、すぐに、東の大依羅神社の方まで、南は、大和川堤の上にへばりつくようにたっている浅香の村まで稲田が続いていた。したがって、私達は、五月になると稲田に水がはいって苗がうえられ、蛙がやかましく歌を歌い、秋になるとたわわにみのった稲穂の上をトンボが飛び、稲田から運動場に迷いこんだ蝗がはねまわり、黄金色に色づいた稲田を走る畦道を曼珠沙華の真紅が点綴し、初冬になると、刈りとられた田園の稲架（はぎ）が立てられ、その上を住吉の浜から吹きあげてきた木枯しが喚声をあげながら吹き抜けてゆくという風景を満喫したのである。

（中略）

大阪商大の校舎（とくに時計台）は、遠くからでもみることができた。大鉄線（今の近鉄南大阪線）の大和川にかかる矢田鉄橋の上からも、南海高野線や阪堺線の鉄橋の上からでも、商大校舎はすぐに判別できた。商大の卒業生ではないが、商大とは関係の深い内田穰吉氏（現奈良県立短大学長）は、戦時下の「商大事件」を歌い上げた歌集『たたかひの獄』の中で、「窓ごしの商科大学、大和川、青麦畑、雨はふりつつ」と歌っている。戦時下の空襲の関係もあって、大阪中之島の若松町の拘留所から、堺の刑務所へ、また堺から若松町へと、手錠をかけられ、編笠をきせられて護送された被告たちの、切ない母校への情感を、この歌は、歌いあげられているが、それは、市内の連隊から金岡の連隊や陸軍病院に、また金岡から戦地へと輸送されていった商大出身の兵士達の感懐でもあったろう。「窓ごしに」ちらっとみえる校舎の瞬間の映像——しかし、その校舎に生活した時には、親しい友人と哲学や人生や愛について、自由に語りあう時間があった。本を読み、コーヒをのみながら感動した映画のシーンを回想する時間があった。しかし、逮捕と同時に、いや入隊と同時に、それらはすべて失われた。「窓ごし」に見える校舎は、単なる建物の映像ではなく、失われた過去のささやかな庶民の幸福、希望、生活そのものの象徴であったのである。

吉村励「杉本町界わい——戦前と今と」『有恒会報』第113号、pp.12-13

樋垣：白堊の杉本町の新学舎は大変美しく印象的ではありましたが、あの杉本町界隈はまだ風が少し吹くと白塵が舞い上り、また人造肥料の臭いの強い頃でした。私は柔道部に籍を置いていまして、あの付近で合宿したことがありますが、赤い南瓜が大変うまかったと素朴な思い出が強いです。

杉田：私の入学当時は杉本町駅の出口は今とは逆に、当時は貨物の引込み線がなかったために東側に出ていました。只今はもう大学の構内になっていますが、当時は学部、予科、高商部と校舎がL字形に建っていて、その間に畑地がまだ残って居りました。軍事教練が最初の一時間目にある時は、遅刻しますとヒゲの配属将校に詰問されて叱られますので、少し遅れた時は学部を通らずに、高商部の横の畑地を走り抜けて行ったものでした。入学当時、織田松先生から、杉本町学舎ができるためにこの辺の百姓は農地を取られると皆反

対して商大に対して悪感情をもっている。牛を引いて大挙して市役所へ反対陳情騒ぎもあったほどだしするから、畑地は決して通らぬように、畑地を走ると畦がこわれて百姓がおこるから、ときびしく言われていたものでしたが、遅刻しそうになる時は仕方なく、何度も畑を走ったものでした。

作道好男・江藤武人編「座談会 昭和時代の学生生活（高商の巻）」『夕古城を仰ぎ見て』 pp.463-464

戦争と大学（戦時中・戦後直後）

当時をいま振り返ってみると、昭和十二年には中国との戦争がはじまり、卒業した十六年の末にはアメリカとの戦争に突入するなど、わが国も世界も何か騒然とした空気につつまれた時代であったといえる。

しかし、われわれが在学していた当時の大阪商大は、大学に昇格してからかれこれ十年以上を経過して、学校としてきわめて充実した時代であったのではないかと思う。その意味では、われわれはめぐまれた学生生活を送ったこと思い返して感謝の気持ちでいっぱいである。

木上兵衛「学生時代の回顧—昭和十年代の商大—」『有恒会百年史』 p.184

しかし全体としては新体制運動ということで、国民の生活はいたるところでしばらくははじめ、米塩等生活必需品の切符制度が、また、十六年四月には六大都市で米配給通帳制、外食券制度が実施され、一日の配給は一人米二合三勺となった。

当時、高商部の食堂ではカレーライス等が食べられたが、この制度の実施により危うく廃止の憂き目にあうところを、当時の学生課担当竹山教授が大阪府と再三にわたり交渉され、お蔭で卒業近くまで継続されて大変助かったと思っている。

槌野信徳「高商部の学園」『有恒会百年史』 p.256

学部の馬術部の所には高射砲陣地が出来て、高商部の卒業生の一人が隊長で来ていた。また、予科の所には海兵団が移って来て校庭で訓練しており、隊内での古兵と新兵とのいやらしさが我々の目にもじかに映ってくる状態であった。

栗田達男「学徒動員の時代」『有恒会百年史』 p.273

入学式は予科・高商部の校舎が大阪海兵団に転用されていたため、学部校舎で挙行された。午後一番に、学校から黄銅製の肉厚の帽章をいただいた。掌に伝わるズッシリとした感触と、憧れの二条の白線帽に胸をときめかせていると、突然、敵機来襲を告げるサイレンの音に全員一斉に校舎の地下壕へ避難。かくしてあわただしい一日が終わった。

平尾順一「白線帽一年生」『有恒会百年史』 p.296

私は太平洋戦争が始まって四ヵ月後の昭和十七年四月、杉本町の駅を下り、一面のカボチャ

畑をぬけて高商部の校門をくぐった。

安川八十次「戦時学生時代の思い出」『有恒会百年史』p.306

他は、運動場での薩摩芋掘りの件である。戦争末期から敗戦後というのは、食糧難の絶頂の時代であったから、教官・職員は杉本町学舎にある運動場を区割りし、自力で耕作して芋作りをやっていたのである。いわば、芋作りのために大学へ通っていた、といわれても仕方がなかったかも知れない。学舎が接収されたのが敗戦後の十月初旬のことだから、まさしく芋の収穫期であった。放っておけば、米兵に踏みつぶされてしまう。そこで、愚妻や子供ともども家族を総動員して、一部米兵が既に入居を始めていた大学構内へ芋掘りに出かけたのである。そして、掘り出した芋を持てるだけみんなして担いで、雑踏する阪和線・城東線・阪急神戸線を乗り継ぎ、何とかして自宅まで持ち帰った。昨日の大学教授は今日の担ぎ屋といった恰好だ。それを蒸して空腹を満たした感激は、今でも記憶に残っている。当時は、既に大学にある什器一切の持出しが米占領軍によって禁止されていたから、この担ぎ屋も米兵の検問を一応は受けたのかも知れない。

実方正雄「法学部設立の風土」『有恒会百年史』p.329

戦争が終わり、学徒勤労動員が解除され、私たちは空襲被害の殆どなかった杉本町へ戻った。これからは初めて自由な勉強が出来る、死に直面することもない。敗戦の悔しさよりも、明るい希望が先に立ったのがこの頃の実感であった。予科・高商部のキャンパスを使用していた海兵団も間もなく撤収するだろう。学友たちも戦場から戻り、明るい自由な商大がよみがえるのも間近だ。こんな見通しが甘い夢に過ぎなかったことがわかったのも、すぐのことであった。

(中略)

九月末、道仁校舎の講堂で卒業式が行われた。商大事件の復学組、軍隊からの復員組、私たちの残留組と学年度の入り混じった混成卒業生であった。就職先はまだ決まっていなかった。桜花爛漫と咲き誇る大和川畔に聳える白亜の学舎が入り口で、ミナミの焼け跡に残った小学校のおんぼろ校舎が出口という五年半の商大生活のフィナーレであった。

松本津郎「ミナミの学舎」『有恒会百年史』pp.334-335

ぼくは一九四一年に予科へ入学したので、予科時代は杉本町校舎で学び「春風にほう浅香山」や「夏草繁き校庭」の思い出はあるが、ぼくより三～四年後に入学した人たちは入学したときから既に杉本町校舎はなく、先日有恒会の会合でお会いした後輩から「ぼくたちは入学してから卒業までずっと市内の小学校で、杉本町へ行っても母校という感懐が湧かない」というお話を伺って驚き、かつ同情したことがある。

奥村茂次「分散校舎あれこれ」『有恒会百年史』p.335

ともかく高商部に転入学してから学部を卒業するまで、一度も杉本町キャンパスの門を潜った事がないのはまぎれもない事実である。だから同窓会などの会合で先輩や後輩の人達が杉本町の話を始めると、いつも私一人が話の中に入っていけない。何でも無いような事のようにだが、「同窓」という意識の中に学舎にまつわる思い出を共有したという要素は相当大きなものだと思う。時には冗談にしろ「君は本当に商大を卒業したのか」と言われた事もあり、正直なところ、あまり同窓会に出たくなかった。

その代りと言っては何だが、心斎橋や難波界隈の地理には随分詳しくなった。当時は休講になる事も多く、そう適当なアルバイトもまだなかった時代で、暇だけはたっぷりあったが、何分食うや食わずの時代だから小遣金どころではない。だから現在のように酒を飲んだり、ディスコで踊ったりといった派手な遊びは考えられもしなかったが、次第に復興して行くミナミの繁華街を友人とほっつき歩いたり、たまには乏しい小遣いを集めてくじ引で何人かが映画を見に行ったりした。

太田昭「杉本町学舎を知らぬ卒業生」『有恒会百年史』p.338

一般に、長年勤めた退職者とともに消えていくさまざまな職業分野の専門的知識や経験をも一度学問的に研究し、社会に役立ててはどうかという主旨のもとに、市大が大学院経済学研究科の門戸を五十歳以上の社会人に開放した制度の二期生として、三十数年ぶりに杉本町キャンパスの正門をくぐったのは二年前になる。

思えば、終戦直後の混乱期に道仁・明治・朝の三つの仮校舎を転々と移転し、流転の学生生活を送ってきた旧商大生にとって、杉本町キャンパスは夢にまでみた幻のキャンパスであった。それゆえ、六十歳を過ぎて、それまで考えてもみなかった大学院で勉強できる喜び以上に、母校本来のキャンパスで勉強する機会を得たことは望外の幸せだったと思う。過ぎ去った青春時代を回想しつつ、素晴らしい環境のなかで老いて再び研究生活をエンジョイできた日のことを、二年間の課程を修了した現在、折にふれ思い出しては感慨に耽る今日この頃である。

田中彦一「分散学舎と杉本町キャンパス—母校とは何か—」『有恒会百年史』pp.339-340

終戦直後

終戦で勤労働員も召集も解除となり、九月中旬より杉本町本館で全学の授業が再開された。戦災による住宅難、交通事情の悪化にもかかわらず、新しい希望に燃えて学園に集まる者が日を逐って増加した。しかし教材、ノート等も乏しく、授業が軌道に乗るにはなおしばらくの時間が掛かった。

教練、作業がなくなって授業のみとなり、我々予科生も放課後、無慮五十万冊の蔵書を誇る商大図書館に入り浸れるようになったのは非常に嬉しかった。永い戦争でまともな本に接することが非常に少なく、いわば活字に飢えていた我々は、連日暗くなるまで本に読み耽った。赤丸のシールを背に貼った閲覧禁止本も自由に手にすることが出来、内容もよく判らぬままに感

銘を覚えた。

接收命令

かかる幸せは永く続かなかった。十月初め、占領軍より七日以内の立退命令が発せられた。戦争末期に予科・高商学舎を海兵団に、本館裏グラウンドを高射砲陣地に接收されていたのが軍事施設とみなされた。

移転は予科・高商・学部の学生がそれぞれ積み込みと荷降ろしの二手に分かれ、差し回しに日本と米軍のトラック多数で輸送に従事した。我々は教壇、机、椅子、その他、事務室の什器備品類、図書館・経済研究所の膨大な書籍、資料、書架等を、何の荷作りもせず、裸のままリレーによって運び出した。戦災を免れた貴重な文化財も単なる荷物の山と化してしまった。行先は、予科・学部は島之内道仁小学校、高商部は桜川小学校、図書館は大宝小学校と学舎の分散が始まった。移転作業は米兵の「ハボ、ハボ」（早く、早く）の掛け声に急ぎ立てられた。

戸奈巳喜雄「分散校舎の頃」『有恒会百年史』p.341

青春時代の思い出の多くは、キャンパスでの交遊につながる。占領下の特殊事情によるものとはいえ、三年の間、一度も杉本町に足を踏み入れずに終わった我々は、一世紀を越える本学の歴史の中でも最も恵まれないゼネレーションだったといえるだろう。

西尾昭二郎「キャンパスを持たない大学」『有恒会百年史』p343

応召によって壮年は農村から前線へ、食糧はますます不足し、米は配給制となり、食糧補充のため、校庭を耕して、甘藷を作ることになった。職員学生共に構内西北敷地今の新教室や文学部の研究室のある位置の開墾に汗を流した。

(中略)

講堂に奉安してある両陛下の御真影を、空襲警報が発令するごとに、事務長が肩に背負い、本部の地下室に移し、私共はそれに付き添って守護の任務を果し、警報解除と共に元の講堂に移すのである。空襲が頻繁になって、この余裕もなくなったので、御真影は山の方へ疎開し奉ることとなり、学長が奉戴する車を職員一同で見送るという行事があった。

(中略)

杉本町の現在理工家政学部のキャンパスは、南瓜、甘藷、大根の産地であったので、私共は小使さんに頼んでこれらを買っておいてもらい、研究室に保存し、大根などは細分して書類類に入れ、天王寺駅を通過するという苦労をしながらも、毎日研究室に通うことは家族の食糧補給の実益を兼ねていたのである。

谷口知平「大阪商科大学より大阪市立大学法学部へー終戦前後ー」『有恒会百年史』pp.375-377

第二次大戦の末期の事情から、予科入学式は延期されていた。その直前にかねて覚悟してい

た陸軍への入隊を命じられたので、報告^(ママ)労々挨拶のため杉本町の学校に行った。小数の職員があるだけの(学生は勤労働員)、殆んど無人に近い校舎に入り、訪問の要件を伝えた。

面談した係員は「入隊お目出とう」と型通りの挨拶の途、「入学式は住んでいなくとも貴方は当大学の学生ですから、在学証明書を出します。又、これが予科の校章です。差し上げますので帽子につけて入隊してください。学校のことも何時でも思い出して貰う為に、この機会に校舎も案内しましょう」と、大学本館の中を丁寧に案内してくださった。多分、若くして死んで行くであろう青年に、せめてもの学生時代の思い出を饒げよう——との親切な配慮をその背後に感じながら、言う言葉もなく付いて廻るだけであったが、この事は今でも自分の記憶に強く残っている。

小池一男「予科入学当時の思い出」『わが青春の予科』pp.46-47

数年前、所用で岸和田へ出かけた時、急行列車の車窓から大阪市大のキャンパスをかい間見た。数分間のことながら、旧学部、予科の建物がいまだに健在であることを確認は出来たのだが、駅から見えるはずの一面の野菜畑がすべて学舎群に変貌していて、もはや往時を想い浮かべることが出来なかった。(平成三年十一月二十三日記)

石田弘「大阪商科大学予科の頃」『我が青春—追憶の大阪商科大学予科—』p.45

戦争が終わり、九月から杉本町学舎で授業が再開。生駒、信貴、金剛の山なみがくっきりと浮かび、教室の窓からは、稲穂ごしに杉本町の駅舎が見渡せた。しかしながら、この喜びも束の間、十月中旬に米国進駐軍に学舎を接収され、南区の焼け残りの小学校へ追い出される羽目になった。

すべてが焦土と化し、瓦礫の山となったその中に、ポツンと残った道仁の仮校舎では、冬になると、破れた硝子窓から寒風遠慮なく葺きこみ、先生はオーバーを着用しながら、生徒はマントにくるまりながらの授業であった。

平尾順一「青春を走る」『わが青春の予科』p.133

【昭和18年】

戦局は日ごとに苛烈となり、テニスは敵性スポーツ、軟弱スポーツとして、部活動は事実上停止され、コートは芋畑になり、加えて学園生活も教室での講義より軍事教練が重点で、最終勤労働員となり軍需工場に出勤し、秋には学生に対する徴兵猶予制度も廃止され、学徒出陣と共に脈々と流れて来た伝統の硬式庭球部の戦前の歴史の幕を閉じ、おくれればせながら、諸先輩を追って私も兵役につきました。

沢松豊「戦中・戦後復興期の思い出」『大阪市大硬式庭球部九十年史』p.59